

◆発刊記念ダイジェスト版◆

小説『海わたる』①

安達 和俊

—プロローグ—

西向きに広く開かれたカラス戸から見える、大小さまざまな船舶の行き交うこの海峡の景色が、故国の内海を思い起こさせることにはもうずいぶん前から気が付いていた。

—小坊主修行—

海わたるの故国は、東洋の東の端の島国であった。もともとはその国の侍の家の長男として生まれたのだが、わたるの父親が仕えていた主家がお取り潰しに遭うと一家は帰農した。だが父親は、主家の禄を食むも、他家に年貢を納めることを潔いと

らすであるうことを知りながらも……。

括った。

その際一度は頼んでみたものの、やはり子連れでは養子には入れぬこととなり、一人っ子であったわたるは、近くのお寺に預けられることとなった。

結局その寺で四年の歳月を過ごすこととなった。

わたるは、月に数度ある住職の講話を間近で聞けることを何よりも嬉しく思った。

特にこの寺では、檀家の子弟のみならず近隣の子供たちのために寺小屋がほぼ毎日開かれ、孔子の説かれた儒教の教えの中でも特に「論語」が取り上げられ、素読のみならずその字句の意味の説明がなされ、またその字句が習字のお手本ともなっていた。

わたるも他の小坊主衆とともに、この寺小屋への出席が許されるようになり、年を経るにつれ一番前の一番右端の席に座れるようになった。

その後父親も、もう二度目の仕官は諦め、いよいよ話のあった養子先に行くことに腹をなした。

住職を、いつしかわたるも、こころのなかで、真実の父とも慕うようになっていた。その住職に、あの日そのような災難が降り

掛かろうなど、誰も夢にも思わなかったことであった。

代官所の役人が、嫌疑についてはつきりと告げぬまま、住職を捕縛したのであった。

寺はこのため廃寺となったものの、その後大老が暗殺されると、他の小坊主衆は身元の引取り先があれば引取り先にて謹慎と言うことになった。

だがわたるだけは、引取り先がないため瀬戸内海のA大島に隣接したB島へ、形ばかりの遠島と決まった。

—遠島—

その後わたるは、役人一人に伴われ本州側の陸路を徒歩で一刻西に歩を進め、ある船着き場に着いた。

B島の波止場では、役人もわたるとともに下りると、これと見て頭を低くして近づいた小柄だが頑強そうな青年に、役人は二言三言問い質した上で、手鎖代わりに形ばかりわたるの両手を結んだ長綱をほどきながらわたるをその青年に引き渡した。

青年は、わたるを伴って、島の高台の小屋に住む、島民が「百年猛者」と呼ぶ、この島に最初に着いた罪人である白髪・白髭の古老のもとへ赴いた。

古老の小屋の南の庭の上りまでは、一面の薬草園になっていたのであった。さらにその

南側の斜面も段々畑になっていて、古老や青年Tらも、その一部で大根や胡瓜などの野菜をはじめ粟などの穀類も作っていた。

田圃もあり、米も稗とともに作ってはいたものの、もともと雨の少ない瀬戸内では、島のほぼ天辺にある溜池からの用水の量も限られていて、その収穫もわずかであった。

ある日、わたるが「百年猛者様は、どのようなお人なのですか？」とたずねると、Tは「それについては、詳しいことは話せぬが、とても学問に秀でたお人だから島民は、こぞ古老のもとを訪れ、話を聞く。そしてそうしたときに島民は、米や野菜を持ち寄ってくるのだ」と答えた。

島の西側の切り立った崖を、縫うように造られた急な階段を下りて、Tとわたるが波止場に着いた頃、いつもの連絡船が降ろされ、た積み荷は、もうすでに島民たちによって分けられていた。

ふと沖合に目をやると、遠くに手漕ぎと思しきやや大きめの舟が、波間を木の葉のように漂っていた。

そうこうする間に、その大きな舟もどうとう上下逆さになったかと思ったら、三人ほどが海に投げ出された。Tは、わたるに声を掛けるや、その場に荷物を置き、今来た道を駆け戻り、波止場に停泊中の、島の漁師の空の船に飛び乗り、現場に急いだ。

百年猛者の小屋に落ち着いてからは、百年猛者の指示に従い、大人の男性と少年は寝かせ、一番元気な年かざの少年だけを、百年猛者の机の横に座らせ、古老がTとともに事情を聴いた。

三人はお隣の國清の禅寺の禪師とその雲水たちであり、小型船とは言え二本マストの帆船に、数多く積み込んだチントーチェンすなわち景徳鎮からの高級陶磁器について解説を加えるため、長崎から大坂に向かう途中、この島の西の海で岩礁に乗り上げ、救命用短艇の内の一艇で、そこから一番近い島を目指して漕ぎ出したと言っていた。

今朝早くわたるの付き切りの看病も虚しく、年少のC雲水が息を引き取った。

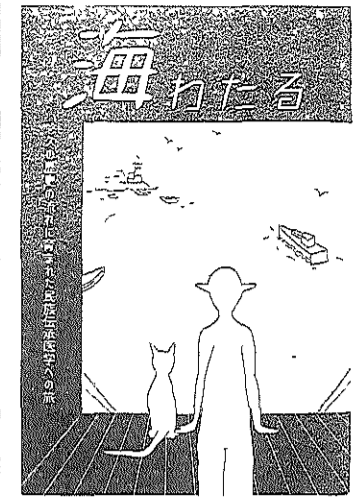
この間わたるは、煎じ薬を口移しに含ませ少年の体が冷え出してからも、幾つも温めた石をぼろ布で包み、少年の体の冷えた部位に置いてやった。

「大事な話をするが……と百年猛者。」C雲水は十四歳になったばかりだったし、おまえも、今はまだ十四歳だが、もうすぐ十五。また背格好もほぼ同じ

くらいだ。覚悟さえできていれば、今ここで入れ替わったとしても、怪しまれる心配は、それほどないように思うのだ。」

わたるは「C雲水の氏名は、海平(ハイ・ピン)、名前こそ違え、名字は私と同じ字の海です。何か運命の見えない糸のようなものを感じます。異国で倒れた海平雲水のためにも、今度は私が彼の分まで生き抜くべきなのかも知れません。この先は、百年猛者様のご判断にお任せ致します」と答えた。

そうと決まれば、善は急げ!」であった。



『海わたる』(科学新聞社)は令和元年7月発行。著者の安達和俊さんは、多治見市明和町で「カイロプラクティック医王堂」を運営している。物語の時代は、幕末から明治。主人公の海わたるが、アジア、東欧・中東などを巡りながら、さまざまな人に出会い、各地の民族伝承医学や宗教・文化に触れて成長していく、人生の旅が描かれている。多治見市本町、ながせ商店街の「東文堂ひらく本屋」をはじめ、各インターネット通販サイトで入手できる。

カイロプラクティック 医王堂 多治見市明和町4 電話 091-2445